

理事通信

樺太、西海岸の恵須町
町主子で、昭和十二年七
月、原田種雄・カネの次
男として誕生し何不自由
なく過つて三才の時、
冬の遊びの一つであるス

なり、甘酸っぱい味がやめられない。大量に取って「ジャム」に加工するフレップ酒を作る楽しみもありました。

海での思い出は、夕方海面が二十、三十センチ盛り上がり「シシヤモ」

月九日、空襲警報のサイレンが鳴り、王子製紙会社が危険なので避難を始めた。母親と子供は、上野須取から珍内、久春内まで行くと汽車に乗れるので、そこまで歩くことになる。夜は艦砲射撃

く。珍内役場では、白旗を見たが何のことか分らず、もう少しで久春内に着く所で在郷軍人が戦争は終わった、元に戻れ。時に八月二十二日脱力感が全身を包んだ。二十二年七月引揚船で樺太を後



恵須取の想い出

北海道恵須取会副会長

原田 廣記

にする。七月二
十日函館に着い
たら港の船は、
総て万国旗や大
漁旗で我々を歓

園で子供スキー大会があり優勝したのが、スキーとの係わりとなり、その後に繋がった。短い夏は、家族で海水浴に行き寒い時は、焚火をして泳いでいた。山での思い出は「ブレップ」を取って食べるのと、口の周りは赤紫色に

や「鱒」が群れてくるのをタモで掬い上げ、一家でカマスに入れて軽便鉄道で運び、家で手分けして「身欠ニシン」にする。そんな楽しい日々の中、昭和十九年幼稚園を卒業、四月には、恵須取第二国民学校に入学、二十年八

で木陰に伏せていると、頭上を火の玉が飛び交ひ、日中は、飛行機からの機銃掃射の中を逃げ回り、一日八里(約三十キロ)歩くと子供にはとてもつらいが、近くの学校に寄り、食事の準備、おにぎりを作り背負い、また歩

迎えているのかと思つたら、実は、海の日念ひでした。樺太での生活は十年間でしたが、長くて短い時を過ごしたことになる。樺連の将来は見えてゐる。いかに、未来永劫に樺太を残すかが私達の使命であると思つた。

見を求めた

「は杉本を部長より、東京の一入の意思表示がある」

力ある

て、三品、検事公署、す

は 劣 け れ た お モ ま 銃 い じ こ
是 等 者 納 の 充 ム マ 後 イ ジ コ
に 類 入 金 有 其 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百